ることであつて、星野君も死して尙瞑す可きであると思ふ。

星野君の浮世繪方面の造詣に至つては、既に藤懸博士からも、御話があつたから、私は略し、一つ附け加はへておくが、君は島地大等君を助けて、共々に、獨逸人で日本佛敎の研究家たるペツオルト氏の爲めに、天台學の研究を補佐すること多年、その發音から云へば成つてをらぬと云ふ人もあらう所の同君の變な英語——君は越後訛が終生直ほらず、日本語の發音も能く分からないのが特色だが——でも、造詣が深く、知識が豐富だから、その如何と思はれる樣な君の英語で、ペツオルト氏と常に應酬されてその間意志の疏通を見てをつたなどは、眞に奇中の奇で、彼我意思の疏通は必ずしも言語ばかりに依らないもので、寧ろその內容たる思想が大切であると云ふ自信を私に起さしたのは、君であつた。かう云ふ風で、星野君と私とは專門の學問は大に違ふが、君に由つて啓發される所が決して少くなかつた。而も斯人今や則ち亡しで、寔に大息に堪へない（文責記者）

# 故星野日子四郎君の業績

財團法人明治聖德記念學會研究所長
文學博士　加藤玄智

昭和九年三月卅日の夜、平素の如く、僕は朝陽星野日子四郎君と共に、明治聖德記念學會の研究所でもつて、夜遲くまで神道書目カードの調整と整理とにいそしみ、殊に四月初の一週間は春季休暇にもなるから、今晩は大に馬力をかけてやらうなどと話しながら、彼是れ夜十時半迄もかゝつてやつてをつたが、漸くに仕舞つて、同夜十一時近くに、星野君は、研究所を辭去して歸宅された。あとで聞けば十一時半頃就寢して、ほんとに眠られたのは、その夜十二時頃だつたらうと、家人は話されてをる。星野君は十一時半寢に就かれても、尙丁度本會發行の紀要四十一卷の新刊を讀み耽つてをられたさうだ。さうして十二時頃就眠されて、二時間!!、三月卅一日のスモウル、アワーズである午前二時頃から腦溢血を起して苦しみ始められ、その三時にはもう重態に陷られた。さうして卅一日の午前八時二十分と云ふに、溘焉として逝かれた。洵に飽氣ないと云はんか無常迅速と云はんか、何とも譬へ樣がない。余は卅一日の朝八時二十五分頃に、星野君の宅から死去の電話があつた時は、しばし夢かとばかり驚いた。まだ寢て居た僕の子供に、それを傳へたら、エ、夢ぢやないかと叫んだ。それは無理もない、彼れは今朝はねぼうして、まだ寢床の中で華胥の國に遊んで居たからであるのみならず、此の子供に昨夜十一時近くに宅の門前で、暗の中を門燈の明りにすかして、星野君が歸宅の際、一言二言挨拶を子供と交換されて、辭去された。その星野君が、四五時間の後にはもう此の世の人で無いと云ふから、全くまさ夢と、

子供が寢床の中にねぼけながら、思つたのも尤である。

嗚呼星野朝陽君!!君と僕とは高等學校以來の友人であつたが、君は國史、僕は哲學と專攻が違つてをつた爲め、帝大では餘り親しくはしなかつた。然るに大正元年明治聖德記念學會が新設されてから、君は僕と共に同會の研究所に働くこととなり、爾來每週君と相見えて、同會研究所の今日迄の業績は、君の眞摯なる研究とその一見識ある提案とに依るものが多かつた。而て多年君と心懸けてやつてをる神道書目の調査も、次第にその歩を進め、今や目的の十中八九を終へたと云ふ所迄來てをる。天若し君に藉すに、永くとは云はないが、一兩年の歲月を以てしたならば、君も亦多年御盡力になられた神道の書籍目錄の發刊を、目の當り見られることが出來たらうにと思ふと、僕亦感慨無量なるものがある。然し君の學績は決して埋沒する譯で無い、この神道書目の整理は、君の歿後も尙着々としてその歩を進めつゝあるから、不日その上梓出版も實現される事であらうと思ふ。顧ふに過去二十有二年、君は全く本會研究所と終始されたと云つても可い。それは君は臨終迄本會の紀要を讀んでをられ、紀要四十一卷を手にしながら就眠されたまゝ逝かれたのみならず、本會に於ける君の業績の一として數へることの出來る神道書籍目錄の公刊も目睫の間に迫つてをる所迄漕ぎつけて、君は長逝された。加之星野君の言葉は越後訛の上に、最近中風症の氣味で、その不明瞭な言語は、何と勸めても、學會の講演を引受けられなかつ

たが、本年二月の例會には、どこをどうしたか、建武中興記念講演として、星野君が多年心血を灑がれてをつた神皇正統記の話でもして呉れませんかと、僕は君に勸めて見たところ、いつになく、一言の下に快諾された。その時僕は誠に不思議なこともあればあるもの哉、講演嫌な星野君がどうして、こんなに講演を快諾したのだらうと思つた。その講演大要は本紀要別項所載の通りであるが、あれ程講演嫌な星野君が、一言の下に快諾され、それが又星野君が本會に、二十有二年間在勤中、唯の一回の講演で、そのアルファでありオメガであつたのみならず、聽者の評には、星野君は訥辯の雄辯だと云ふ讃辭さへ受けられたことは、考へれば考へる程不思議で、蟲が知らせたか、君はもう死期が近づいたから、そんなに自分の講演が聞きたければ、一つ置土産にやつて置かうかと云ふ樣な、無意識的にさう云ふ氣分でいつになく、講演を快諾されたのでは無からうかと思ふと、益不思議でたまらなくなる。何れにしても二月に此講演をやつて、三月に死でをられる。思ふに過去二十有餘年間に於ける星野君の本會に對する御努力は、偉大なるものがあつたと思ふ。この星野君の本會に對する功績は直に日本否世界の學界への貢獻であると思ふ。是れ本會が爰に星野君のために追憶講演會を開催して、同君の功績を記念する次第である。